

ボランティア半世紀 101歳、まだまだ元気

ベルマーク大使・幡野さんの近況



近藤周利さん(左)と幡野たいさん

ベルマーク大使の幡野(はたの)たいさんは、今年4月12日に101歳になられました。次女が小学生だったときにベルマーク活動への参加をPTAに働きかけ、それ以来、半世紀ものあいだマークを仕分けてきました。PTAでの活動が、児童のベルマーク委員会に引き継がれても、サポートを続けました。2016年に大使に選出されましたが、活動実績の長さは大使の中でも最長でしょう。山梨県上野原市にあるご自宅と、幡野さんの“マネージャー”がいる上野原市教育委員会を訪ねました。



器用な手先を使ってチラシを折る幡野さん

年齢を重ねるにつれミスが気になり、今は仕分けをお休みしている幡野さん。仕分けは生きがかったそうで「やめるとき、本当に寂しかったですよ。つらかった」と言います。82歳で胃がんになり、もうだめかと思った時、委員会の子どもたちからのメッセージを見て「私、まだ仕事があったんだ」と元気を出したそうです。

現在は自宅にいるほか、週3回デイサービス、時々ショートステイに通っています。聞き役のほうが好きだそうです。この日は今までの経験をたくさん話してくだ

さいました。長生きの秘訣は「物事をいい方へ解釈すること」「好き嫌いをしないこと」。好物はお肉です。

ベルマークについてだけでなく、戦時中にご主人を亡くした辛い記憶や苦勞、デイサービスでの楽しい時間など、101年歩んできた幡野さんの言葉には説得力があり、いつまでも聞いていたくなりました。

幡野さんの功績を伝えるのに、欠かせない人がいます。「私は何もしてないんです。ただのつなぐ係。それは、おばあちゃんのすごい功績を見てもらいたいから」。そう言うのは、上野原市立上野原小学校の元校長先生で、今は教育委員会に勤めている近藤周利(こんどうひろとし)さんです。近藤さんは、担任、教頭、校長にいたるまで通算4回、同小に勤務しました。ベルマーク委員会の顧問を務めたことがあり、学校に貢献する幡野さんを長年見てきました。その頑張りを知ってほしいという思いから、まるでマネージャーのように、取材を希望すると率先して幡野さんに連絡を取ってくださいます。「おばあちゃんの写真には、私もおこぼれで写っていることが多いんです」と笑います。

帰る際、幡野さんは2階の階段から顔をのぞかせてくださいました。丈夫な足腰を使って降りてこようとする幡野さんに、思わず「そこですいすよ」と声をかける近藤さん。優しい幡野さん、いつまでもお元気で。

ベルマークを通じて国際協力

オイスカ高校・澤根さんの頑張り

第1陣大使に任命された、学校法人中野学園オイスカ高校の奉仕活動委員長は、10月に澤根日向(さわねひなた)さん=写真左=から、松下友要(まつしたゆめ)さんへ引き継がれました。

友愛援助(ベルマーク預金を直接寄付にあてる支援)を通じて海外での地球緑化活動を支援しています。澤根さんは「国際協力というなかなか出来ない経験をしたことは誇りに思う」と振り返りました。

「とにかく真面目」、地味な仕事を「毎日地道にコツコツ出来る場所」が評価され、顧問の鬼石郁子(おにいしくこ)先生=同右=からの指名で委員長になりました。しかし、「人の上に立ってまとめる役は今までやったことがなかった」

ため、当初は苦勞もあったそうです。毎日の清掃時間、委員以外の生徒も含めて分担するマーク仕分けでは、リーダー役として先生の「代役」を務めました。

澤根さんは「焦らず仕事に慣れること。仕分けしたベルマークが何に使われているかを知って、堂々と委員長の活動を頑張る」とエールを送り、松下さんは「毎年50万点以上、友愛援助に寄付することを継続し、途上国が緑でいっぱいになるお手伝いをしたい」と応えました。



4代目大使「NO.1を」

神戸・魚崎小の小島さん

児童数1258人。神戸市内でも屈指のマンモス校で、7年前には全国でも最も児童が多い小学校とされた市立魚崎小学校(東灘区)は、ベルマーク運動に参加して今年でちょうど半世紀。集まるマークも年間15万~20万点と多く、4年前には累計で1千万点を突破しました。PTAベルマーク委員会の委員長は2016年からベルマーク大使も務めており、今年度は小島香奈恵さん=写真前列右端=が委員長兼4代目の大使として活躍しています。

小島さんは、もと

もと細かい作業が好きで「PTA役員をやるならベルマークを」と希望して就任しました。自身、小学校の頃からベルマークに親しんでいて「見つけたら切り取って保管するという習慣が身についている」そうです。「年間点数全国トップは難しいかもしれないけれど、何とか兵庫ナンバーワンを目指したい」



明治安田生命保険が南陽小にマーク寄贈

東京・東陽町の明治安田生命保険(相)事務サポート部が、社内で集めたベルマークを隣接する区立南陽小学校に寄贈しました。10年以上、毎年上期と下期に寄贈を続けているそうです。

9月21日に同社で贈呈式があり、事務サポート部の太田郁夫部長、担当者の吉原優子さん、竹井恵美さんから、南陽小PTA学級部部長の川瀨彩加さんに上期分1万8893.9点が渡されました。南陽小は都の年間集票点数ランキングの上位常連校ですが、同社からのマークも大きく貢献している形です。川瀨さんは「いつもありがとうございます。子どもたちのために使わせていただきます」とお礼の言葉を述べました。

同社は「信頼を得て選ばれ続ける、人に一番やさしい生命保険会社」を企業ビジョンに掲げ、各組織単位で小集団活動「Kizuna運動」を展開しています。ベルマーク寄付もその一環で、今年協賛会社別の収集ポケットを作成するなど工夫してマークを集めました。「通勤路で子どもたちと出会うと、ウチからのベルマークで買った備品を使ってくれているかなど、よく思いをはせます」と太田部長は話していました。



「本の力を感じて…」 シャンティが活動報告

ベルマーク財団の友愛援助のひとつ、「ミャンマー(ビルマ)難民キャンプにおけるコミュニティ図書館を通じた教育支援事業」を実施している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会が、2017年度の活動報告のため、10月10日、ベルマーク財団を訪れました。

民族紛争によってミャンマーから流出した難民は、国境を越えたタイ側の難民キャンプで30年以上も暮らしています。キャンプの様子を撮影した動画には、日本から届く絵本をととても楽しみにしている子どもの様子が映っていました。厳しい状況の中でも希望を感じさせるその姿に、現地スタッフのセイラーさんは「本の力を感じています」と言います。

同会が進める「絵本を届ける運動」は、アジアの子どもたちに現地語の翻訳シールを貼った絵本を届けるもので、2017年度は1704人・445団体が参加して絵本を作成、1万8429冊が難民キャンプをはじめ各地に届きました。届けた絵本の累計は29万3744冊になります。ベルマーク財団は2000年からシャンティを支援し、「教育応援隊」として「絵本を届ける運動」の参加校も募集しています。今年も全国で20校が運動に参加しました。

